

abstract

**Stateside Puerto Rican Communities in the U.S.: Hawaii,
California and Central Florida**

Yoshiko Miyake

New York's Puerto Ricans represent only 20% of their total population in the stateside U.S. who are living dispersed in more diverse locations. Attempts to recapitulate Puerto Rican people's struggle for survival in and out of Puerto Rico are being launched in the places other than cities like New York, Chicago and Philadelphia where most of the research of Puerto Rican studies in the U.S. had been carried out until recently. This paper aims at synthesizing the results of my field trips in the last four years to different parts of the U.S., namely Hawaii, California, and Central Florida, seeking to understand the reality in which Puerto Rican people live at present.

Puerto Rico was ceded to the U.S. by Spain in 1898 and the people of Puerto Rico became U.S. citizens in 1917. Since then the number of Puerto Rican people in the stateside U.S. has kept increasing and now equals to that in Puerto Rico. The City of New York was the destination for the earlier migrants from the island and in 1940s the city hosted more than 70% of them. Still in 1970s more than 50% of them were concentrated there. This was the reason why the image of Puerto Rican migrants in the stateside U.S. became strongly associated with those located in that city. But such an image should be definitely replaced by recapitulations of multi-faceted experiences of the people.

I conducted interviews with the people who identify themselves as Puerto Ricans and live in the areas above mentioned. The interviewees were not selected in a systematic manner nor asked a list of questions previously formulated. But through these interviews, some regional tendencies emerged and tips for the further research with more specific topics could be obtained. The paper summarizes them.

米国プエルトリコ人コミュニティの地域的特徴 —ハワイ、カリフォルニア、フロリダ中部地域の事例研究

三宅 禎子

1. はじめに

米国本土に暮らすプエルトリコ人¹の数は第一次大戦以降増加の一途をたどってきた。2000年センサスでは、その数は約340万人となり、島の人口約380万人に匹敵するほどに膨れ上がった。その後もその数は増加を続け、アメリカ国勢調査局の統計によれば2003年には385万人に到達、プエルトリコ政府は米国在住のプエルトリコ人人口が島のプエルトリコ人人口を上回る規模となったと推定した²。

1940年代、米国本土に住むプエルトリコ人の大半を占める9割近い人々がニューヨーク市に住んでいた。その後その割合は徐々に低下していくが、1970年代までは5割以上を保っていた。そのため、プエルトリコ系移民と言えば、ニューヨークに住むプエルトリコ人がイメージされがちであった。しかし、1980年代にはその割合は50%を切り、2000年のデータでは23%にまで低下している（表1参照）。プエルトリコ人は全米各地に拡散して移住するようになっており、地域ごとに異なる移住パターンが生じている。米国本土に住むプエルトリコ人に関する研究も、ニューヨークのプエルトリコ人を対象としたものだけでなく、人口動態の傾向を反映してようやく研究対象地域に拡がりが見られるようになってきた。当然のことながら多様性が増すに伴ってプエルトリコ人コミュニティの全体像を描くことは難しくなっている。またそれぞれの地域に特有な特徴を全体像の中でどう位置づけるかということが新たな課題となってきた。

本稿ではこのようなプエルトリコ研究の現段階での状況を踏まえ、全米各地域に形成されているプエルトリコ系住民コミュニティのうち、ハワイ、カリフォルニア、フロリダ中部地域で筆者が実施してきたインタビュー調査から浮かび上がってきたプエルトリコ人コミュニティの地域ごとの特性を報告する。本研究で対象としている地域は、米国内でプエルトリコ人住民が一定程度集住している郡や市の中から、従来よりプエルトリコ系住民が集中し個別研究も比較的に蓄積されているニューヨーク、シカゴを除外し、特徴的な条件を備えている地域を選択した。ハワイは、プエルトリコ移民研究の進展とともにその特殊な存在がプエルトリコ社会で注目を浴びるようになった。カリフォルニアは、80年代以降プエルトリコ人の人口動態の変化のなかで移住者数が増加した地域である。伝統的にプエルトリコ人は、米国北東部へ移住する傾向が主流であった（表3参照）。しかし、80年代以降の新たな傾向として、西海岸へも移住するようになってきており、その西海岸で最も移住者が多い地域がカリフォルニアとなっている。また、フロリダは、ニューヨークに代わるプエルトリコ人移住地として昨今急激に人口が増加している地域である。現在、ニューヨークに次いで移民者総数が多い地域となっている。本研究では、これらの地域の考察により、プエルトリコ系移民社会で生じている多様化の実態を明らかにする³。

表1、プエルトリコ人の人口—プエルトリコ、米国本土、ニューヨーク市

	プエルトリコ の人口*	合衆国本土の プエルトリコ 人人口**	ニューヨーク市のプエルトリコ 人の人口***および米国本土プ エルトリコ人総数に占める割合
1900	953,243		
1910	1,118,012	1,513	554 (36.6%)
1920	1,299,809	11,811	7,364 (62.3%)
1930	1,543,913	52,774	----
1940	1,869,255	69,967	61,463 (87.8%)
1950	2,210,703	301,375	187,420 (62.2%)
1960	2,349,544	887,662	612,574 (69.0%)
1970	2,712,033	1,429,396	817,712 (57.2%)
1980	3,196,500	1,983,000	860,552 (43.4%)
1990	3,522,037	2,330,000	896,763 (38.5%)
2000	3,808,610	3,406,178	789,172 (23.2%)

*1900年～1990年はRivera-Batiz & Santiago (1996), p.23, 2000年はU. S. Bureau of Census

**1910年～1990年はAcosta-belén et al. (2000), p.3, 2000年はU. S. Bureau of Census

*** Whalen (2005), p.3

****1900-10年代～1970-80年代はRivera-Batiz & Santiago (1996), p.45, 1980-90年代および1990-2000年代はChristenson (2001)

表2、プエルトリコからアメリカ合衆国本土への人口移動（移出者数－移入者数）

	移住者数 ****
1900 - 1910	2,000
1910 - 1920	11,000
1920 - 1930	42,000
1930 - 1940	18,000
1940 - 1950	151,000
1950 - 1960	470,000
1960 - 1970	214,000
1970 - 1980	65,817
1980 - 1990	126,465
1990 - 2000	111,336

表3、2000年センサスプエルトリコ人の多い州上位10州とその人口の推移

	1910	1950	1970	1980	1990	2000
New York	641	252,515	916,608	986,389	1,086,601	1,050,293
Florida	83	4,040	28,166	94,775	247,010	482,027
New Jersey	231	5,640	138,896	243,540	320,133	366,788
Pennsylvania	83	3,560	44,263	91,802	148,988	228,557
Massachusetts	25	1,175	23,332	76,450	151,193	199,207
Connecticut	4	1,305	37,603	88,361	146,842	194,443
Illinois	23	3,570	87,477	129,165	146,059	157,851
California	342	10,295	50,929	93,038	126,417	140,570
Texas	14	1,210	6,333	22,938	42,981	69,504
Ohio	11	2,115	20,272	32,442	45,853	66,269
Total	1,513	301,375	1,429,396	2,013,945	2,727,754	3,406,178

1910,1950はWhalen (2001), p.11より、1970-2000はDuany (2006), p.62より作成

2. プエルトリコ移民に関する先行研究

20世紀初頭から始まったプエルトリコ人の米国本土への集団移住は、1950年代に「グラン・ミグレーション（大移民）の時代」を迎えた。しかし、プエルトリコ系移民社会に関する学術的研究が実を結ぶには、しばらく時間を要した。移民の全体像に関する研究成果に至っては、つい最近になって発表されるようになってきた。それは、アメリカにおけるマイノリティの権利拡大とともにマイノリティの存在を問い直す学問が始動し、そのなかでプエルトリコ人の間から研究者が輩出されるのに時間を要したからでもある。

1960年代、70年代、アメリカでのマイノリティの権利主張の社会運動は、学問の分野にも影響を与え、ニューヨーク市立大学、ニューヨーク州立大学などに、プエルトリコ研究のカリキュラムが整備されていった。1973年にはニューヨーク市立大学にプエルトリコ研究センターが創設され、プエルトリコやプエルトリコ移民社会の貴重な資料が収集された。現在でもプエルトリコ研究で重要な役割を担っている。その後、ニューヨークやシカゴといったプエルトリコ系移民の大規模な集中がみられた地域についての研究が1980年代から90年代にかけていくつか発表された。1992年には、アメリカに居住す

るプエルトリコ人研究者を中心に、プエルトリコ研究学会 (Puerto Rican Studies Association) が創設され、プエルトリコ系移民社会を含むプエルトリコ研究が新たな展開を遂げた。これらの研究活動の進展は、それまで、アメリカ人研究者の目を通して成された「プエルトリコ人は貧しい民で、その文化にも独自性がない」、といった一方的な偏見に基づく研究のあり方を大幅に書き換えていった。例えばアコスターベレン (Acosta-Belén) らは、ミルズ (Mills, 1950) の『プエルトリカン・ジャーニー (The Puerto Rican Journey)』やグレイザー (Glazer, 1963) らの『人種のるつぼを超えて (Beyond the Melting Pot)』、最近の著作ではチャベス (Chavez, 1992) の *Out of the Barrio* などを取りあげ、研究者間に存在する偏見を厳しく批判する。これらの研究では、プエルトリコの人口過剰伝説が強調され、プエルトリコ人の文化不足と組織化の伝統の不足がアメリカで低所得者層形成の原因とされている。アコスターベレンらは、プエルトリコ人の手によって記録されたプエルトリコ人コミュニティに関するコロン (Colón, 1961/1982) の *A Puerto Rican in New York and Other Sketches* やアンドゥルー (Andreu, 1977/1988) の *Memories of Bernardo Vega* などの作品を挙げ、このなかでプエルトリコ人葉巻製造業従事者の労働運動やコミュニティ活動が記録されていることに言及し、「組織化する伝統がない」、「文化が存在しない」、という偏見が誤っていることを指摘し、アメリカ社会に存在するアパルトヘイト的な社会構造を問題にしている⁴。

さらに、90年代後半以降になると、ニューヨーク以外の地域に関してもコネチカット州の州都 ハートフォード市の事例を扱ったクルス (Cruz, 1998)、フロリダ州中部地域の最近の人口動態を扱ったドゥアニ、マトス・ロドリゲス (Duany and Matos-Rodríguez, 2005)、フィラデルフィア市を扱ったワーレン (Whalen, 2001) などの研究が発表されるようになった。また、最近になって、米国本土におけるプエルトリコ系住民コミュニティの全体像を著す書籍が矢継ぎ早に出版されている⁵。これは、ニューヨークやシカゴに関する研究が充実してきた反面、一部地域に研究が偏向してきた点が見直されてきていることを示している。これらの研究の取り組みにより、プエルトリコ移民に関する研究は、近年、急速に発展を遂げつつある。

3. プエルトリコ移民の歴史的変遷

3-1. スペイン植民地時代の移住形態と米国本土への移住の開始

19世紀以前のスペイン植民地時代、クリオージョは師弟をスペインや他のヨーロッパ地域へ留学させ、職人は条件の良い仕事を求めて他のカリブ地域へ移動し、知識層のなかには政治的迫害を受けて他の地域へ逃れる者がいた。また、スペイン当局は、キューバ、ドミニカ共和国、パナマやベネズエラなどへの農業移民、労働移民を奨励することもあった。

アメリカとの関係は19世紀に入り強まった。当時、プエルトリコではタバコ、コーヒーが主要な農産物で、スペインやキューバへ輸出していた。しかし、世紀後半に入ると砂糖生産が拡大し、輸出先でもあるアメリカとの経済関係が強まった。政治的には、スペインから独立を目指す指導者達が亡命先アメリカで政治活動を続けた。例えばスペイン当局から弾圧されアメリカへ亡命した経験を持つ労働運動の指導者サンチアゴ・イグレスias (Santiago Iglesias, 1872-1939) も、アメリカ最大の労働組織と結びつきを強めながらプエルトリコの労働運動を進めていくなど、アメリカとの関係は深く、反米の機運は薄弱であった。

このような経済、政治的つながりのもとに、商人はアメリカ東海岸へ、葉巻製造従事者は葉巻製造業が盛んだった地域へと移住していった。プエルトリコと定期航路があったニューヨーク、ルイジアナ州ニューオーリンズ、葉巻製造都市のフロリダ州タンパなどにコミュニティの核となる少数のプエルトリコ人らのコミュニティが形成されていった。ニューヨークでは以後、これらの移民たちが核となってプエルトリコ系住民のコミュニティが発展していくことになる。

3-2. ハワイ移民、集団移住の始まり

19世紀末、ヨーロッパの拡張主義、制海権、国際的競争の時代潮流のなかでアメリカは、パナマ海峡だけではなくプエルトリコも掌握することを目論み、1898年の米西戦争の結果として、プエルトリコは、フィリピン、グアムと共にアメリカ合衆国の主権下に移された。プエルトリコを統治したアメリカ政府は、プエルトリコの問題は人口が過剰であることにありと位置づけ、その問題解決のため移民政策を推奨した。こうして、アメリカ政府の積極的な移住への支持もあり、プエルトリコ人のアメリカ移住は加速された。ちなみに、日本政府も人口過剰問題の解決策として移民政策を採用し、同時期の19世紀末から主な移民先をアメリカ大陸とし、本格的移民の時代が始まった。しかし、1924年に排日移民法が成立すると、日本人の移民は全面的に禁止された。一方、プエルトリコ人の移民は、アジアからの移民の代替として増加の一途を辿っていく。

そもそもプエルトリコ人の最初の集団移住は、プエルトリコがアメリカ領土となった直後の1900年のハワイ移民から始まる。その年、114人のプエルトリコ人がハワイに移住、これに続いて5000人以上がハワイへ移住した。1900年当時、ハワイでは、砂糖産業を中心とするプランテーションで多くの労働者が必要とされていた。しかし、日本人労働者は労働条件改善要求運動を組織するなど政治的台頭が警戒された。一方、1882年には、中国人排斥法が成立したため、ハワイ砂糖プランテーション協会（Hawaiian Sugar Plantation Association）は、中国人に頼ることもできなくなっていた。そこで1898年にアメリカ領土となったプエルトリコに目が向けられた。また、プエルトリコでは、同年、台風の直撃によって島の半分が壊滅状態となる惨状であった。プエルトリコ当局側も、貧困と高失業率の解決策として移民を推進する政策をとり、その最初のケースとして、プエルトリコの住民が砂糖プランテーションの労働者としてハワイへ送られることとなったのである。

移動経路は、プエルトリコからアメリカ南部のニューオーリンズへ船で移動し、その後、鉄道に乗り換え、サンフランシスコから再び船でハワイへ向かうというものであった。その長旅の過酷さに、サンフランシスコに到着し、鉄道から船へ乗り換えさせられるその隙を見計らって逃げ出した人たちもいた。このようなハワイ移送の悲惨な事実がプエルトリコでも明るみになったこともあり、1921年に数百人の契約労働者がハワイへ渡ったものの、ハワイへの集団移住が継続されることはなかった。

3-3. ニューヨークのコミュニティと公民権運動

第一次世界大戦が勃発すると、アメリカは、プエルトリコの独立運動への対応、主権の存在しない植民地状態への不満解消などの必要に迫られ、プエルトリコの人々に市民権を与えた。この時期数千人規模で行政契約上の建設業の労働者としてプエルトリコ人がアメリカ本土へ渡っている。また、ニューヨーク、ブルックリンの工場へ女性労働者がリクルートされるなど労働移民が活発化した。プエルトリコの労働組合（Federación Libre de Trabajadores）も、アメリカ労働総同盟（The American Federation of Labor）とのつながりから、他の条件の悪い地域よりはアメリカへの移民労働を勧めた。

ニューヨークに移住した最初のプエルトリコ人たちは、マンハッタンのローアー・イースト・サイドにあるタバコ工場が立ち並ぶ地域などに移住した。1920年代の末頃にはイースト・ハーレムに住み着くようになり、この地域がスペイン語で「地区、街」を意味するエル・バリオ（El Barrio）と呼ばれるようになる。1930年代に恐慌の影響でいったん移住者数は縮小するものの、20世紀最初の30年の間に、プエルトリコ人たちはニューヨークを始めとして、アメリカ各地に移住するようになった。1940年代50年代になるとニューヨークの繊維産業などの製造業、サービス業や、アメリカ北東部の農業はプエルトリコ人移民の労働力無しでは成り立たないほどになっていた。移民の増加に伴い、多様なコミュニティ活動が芽生え、労働運動が組織され、スペイン語による雑誌や新聞が次々に発行された。1948年にはプエルトリコ政府の労働局が、ニューヨークにプエルトリコ事務所（La Oficina de Puerto Rico en Nueva York）を設立、プエルトリコ系移民のアメリカ社会への適応を支援するサービスを開始した。

1940年に6万人であったニューヨーク市のプエルトリコ人の人口は、1950年で19万人弱、1960年に60万人、1970年に80万人を超え、2000年では80万人弱となっている（表1参照）。労働力需要が増加したニューヨークにプエルトリコ人が急増した1950年代、60年代の時期は、マイノリティの権利運動が盛り上がりを見せていった時期に当たる。プエルトリコ系住民コミュニティにおいても社会運動が活発化し、市当局に無料の食事サービスや保健サービスなどの政策を実施させている。また、ヤング・ローズ党（Partido de los Young Lords）など、プエルトリコ人コミュニティで活発に活動を行う政治団体が次々と設立され、アメリカ合衆国在住のプエルトリコの人々に新たな政治意識改革の影響を及ぼした。また、連邦政府のコミュニティ・アクション・プログラムなどの貧困撲滅の活動に多くのプエルトリコ人たちが参加した。

3.4. 80年代以降、ニューヨークから全米各地へ

プエルトリコ人たちは、ニューヨークの地を中心として、サルサに代表されるような新たなラテンミュージックを生み出し、ブロンクスやブルックリンで生まれたヒップホップ文化を担い、アメリカ全土を席卷したラテン・ポップ時代を生み出した。また、ニューヨークに住むプエルトリコ人は「ヌーヨリカン」と呼ばれているが、その名称を冠した芸術団体ヌーヨリカン・ポエット・カフェの芸術活動、アメリカ本土在住作家らによる移民文学などを創出し、プエルトリカン・デイ・パレードを盛大に繰り広げるなど、プエルトリコ文化を継承したラテン文化をニューヨークに根付かせてきた。政治的には、マイノリティの権利要求運動の一翼を担い、米国東海岸地域のバイリンガル教育を推進するなど、コミュニティ活動を基盤にした政治活動を展開してきた。

しかし、70年代以降、ニューヨークおよびその周辺では、プエルトリコ人移民の多くが従事していた製造業の衰退が進行した。また、ゲットー地域の再開発により、郊外の富裕層が都市部に回帰し、結果的に、経済的に逼迫した人々が都市部から追い出されていったために（ジェントリフィケーション）、80年代以降、プエルトリコ人はニューヨークだけではなく、全米各地に拡散して移住する傾向が顕著となった。大都会ではなく小都市へ、北東部だけではなく、南東部、西海岸へも移動する傾向が出てきた。また、専門職に就いているプエルトリコ人のフロリダ、カリフォルニア、テキサスへの移動が指摘されるようになってきた。2000年のセンサスによれば、ニューヨークのプエルトリコ人の割合は、米国全土に居住するプエルトリコ系住民全体の二割に過ぎなくなっている（表1参照）。このような移住地域の変化に伴い、各地のプエルトリコ人コミュニティの様相も多様化の度合いを強めている。

以上のような移民の歴史的変遷を踏まえ、次に、筆者が行なったインタビュー調査資料などを基に、ハワイ、カリフォルニア、フロリダ中部地域のプエルトリコ人コミュニティの特性を考察する。

4. プエルトリコ人コミュニティの地域的特徴

4.1. ハワイ、マルチ・カルチャーのなかのプエルトリコ人

70年代以降、プエルトリコ研究の進展や、ハワイアン・ボリンキー（Hawaiian Borinkis）と呼ばれるハワイに住むプエルトリコ人らの歴史の見直しや各種活動、プエルトリコ人移民研究の進展とともに、ハワイのプエルトリコ人コミュニティの存在がプエルトリコ社会で注目を浴びるようになってきた。プエルトリコ人最初の集団移住者たちであり、また、移住後、ハワイとプエルトリコの行き来が途絶えたにもかかわらず、プエルトリコの伝統継承活動が継続されていることにプエルトリコの人々は感銘を受ける。2000年国勢調査によれば、ハワイに住むプエルトリコ人人口は約3万人と報告されている。

しかし、ハワイ移民に関する資料は多くは存在しない。当時を知る由としては、ノルマ・カー（Norma Carr）によるプエルトリコ人労働者の聞き取り調査を実施したものが最も詳細な研究（1989）であり、当時の移民たちの様子を知り得る貴重な資料となっている。ノルマ・カー氏は、50年代末、ニューヨークからハワイへ渡り、ハワイでのプエルトリコ人の存在に着目した。彼女自身は、ニューヨークのプエ

ルトリコ人の社会運動のなかで活動していたわけではなく、そのなかで、その様子を見ていただけた、と語っている⁶。しかし、ニューヨークのプエルトリコ人社会のなかでプエルトリコ人としての自覚を強めた彼女の視点がハワイへもたらされ、そこで再びハワイのプエルトリコ人たちを活性化したのは事実である。ハワイ・プエルトリコ人協会事務局会計担当のジョン・オルティス (John Ortiz) 氏の話に寄れば、このノルマ・カー氏がハワイへ到着して以降、プエルトリコ人の間で積極的な文化活動を開始し、野菜用バナナをつぶした中に肉や魚などを混ぜて蒸したプエルトリコ料理のパステルなどを彼女がハワイで広めた、ということである。また、ジョン・オルティス氏の話によれば、プエルトリコ人たちがハワイで集まるようになったのは、日本人たちが強制的にお金を徴収して葬儀を出しているのを見て、それを真似たのが始まりということであった。貧しくてお葬式も出せないプエルトリコの人たちが、日本人たちのやり方を見て、自分たちもそうやって仲間の葬儀を出そう、と集まったのがハワイのプエルトリコ人たちが集まる理由となったということである⁷。

一方、プエルトリコ系ハワイ移民3世であるハワイ大学マノア・キャンパス英文学部助教授ロドニー・モラーレス (Rodney Morales) は、日本人の青年タケシを主人公にした短編小説「夢を乗せた船 (Ship of Dreams)」を発表した⁸。その作品は、ニューヨークで出版された『プエルトリコ人として育って (Growing Up Puerto Rican)』という小説選集に収録された。題名のごとく、プエルトリコ人として成長していく若者たちの姿を著した英語小説の選集である。そのなかにあって、日本人青年を主人公としている「夢を乗せた船」は異色である。この作品では、ハワイのプエルトリコ人と日本人のコミュニティの姿が、タケシの視線で色鮮やかに、日本語、英語、ピジン語、スペイン語の4ヶ国語がリズムカルに飛び交うなかで描かれていく。ロドニー・モラーレスは、この作品について、筆者に次のように語った。

『夢を乗せた船』は私の作品のなかで唯一プエルトリコ人のアイデンティティを扱った作品です。私の家では両親がスペイン語を話していました。子供たちにというより、夫婦の会話がスペイン語でした。でも学校ではピジン英語 (ハワイローカル言語) でした。家で食べる料理はプエルトリコ料理だったし、家族の絆も強かったけれど、そこには伝統の断絶があったと思います。両親はプエルトリコに行ったことはなかったけれど、プエルトリコ人として生きていたと思います。

『夢を乗せた船』では、文化を共有するところを描きたかったんです。最初はそれぞれのグループがサトウキビ農場でお互い憎みあっているけれど、やがて文化を分かち合っていく過程をね。日本人の青年とプエルトリコ人の女の子を主人公にしたのは確かに奇抜だったかも知れない。でも自分にとってはありふれたことでした。ハワイでの私の生活はずっと日本人に囲まれたものだったし、親友も日本人でした。それにこれはハワイではとてもありふれたことなんです、さまざまな背景の人が混在してるってことは⁹。

モラーレス氏の話からも分かるように、ハワイのマジョリティは日系人であり、そのなかで暮らすプエルトリコ人の生活は他のプエルトリコ人コミュニティでの生活とは異なる。ニューヨークやシカゴで見られるような、日常的にプエルトリコ人コミュニティのなかで過ごしていくような環境は存在しない。ここでの生活環境やアイデンティティのありようは、様々な背景を持つローカルハワイアンとのなかで変容、維持されてきたプエルトリコの伝統文化のなかにある。

ニューヨーク市立単科大学のイリス・ロペス (Iris López) 教授は、研究の結果、ハワイのプエルトリコ人は、ハワイ社会で進行しているマルチカルチャー社会とグローバリゼーションの進展の文脈の中で、プエルトリコ人であるということの定義を多様化させていっていると結論づけている¹⁰。それは、ハワイのプエルトリコ人コミュニティが他の地域のプエルトリコ人の様態とは異なっていること、プエル

トリコ人移民コミュニティにも多様な様態があり得ることを示唆するものであり、本研究者のインタビュー調査の結果とも一致する。しかしながら、ハワイのプエルトリコ系住民に関する研究は未だ未開拓の領域も多く、今後の調査研究の継続が望まれる。

4.2. 移民の歴史が古く、米軍基地があり、メキシコ系住民の多いカリフォルニアでのプエルトリコ人

2000年センサスによると、カリフォルニア州に在住するプエルトリコ人は140,570人となっている。東海岸地域と比較してプエルトリコ人の人口が特に多いというわけではない。しかし、地理的および歴史的特殊性から、移民形態の多様な特性を備えている。

ハワイ移民当時、ハワイ移送の途中で逃げ出し、サンフランシスコにそのまま住み着いたプエルトリコ人たちがいた。彼らが創設したサンフランシスコ・プエルトリコ・クラブ (El Club Puertorriqueño de San Francisco, Inc.) が現在もサンフランシスコに残っている。1912年設立の同組織はアメリカで最も古いラテン系団体であることを誇っている。このクラブのセクレタリーであるイルマイリス・バルガス (Irmairis Vargas) の説明によると、初期はハワイ移民の輸送中継地としてプエルトリコ人らが住み着き、その後、ハワイからサンフランシスコに移ってくる人たちが増えていったとのことである。1937年には、サンフランシスコ近郊イースト・ベイに移住したハワイ系のプエルトリコ人が中心となって別のクラブを創設している。その後もプエルトリコ・クラブで活動していた人が同様のクラブを近郊で別個に立ち上げていく動きが出て、それらのクラブが西部地区プエルトリカン会議として連絡を取りながら現在に至っている。ハワイから移ってきた人たちの後は、プレシディオ海軍基地などに代表されるような大規模基地がサンフランシスコにあったため、軍関連でサンフランシスコ近郊に住むようになり、この地域が気に入る、或は家族ができる、などの事情でこの地域で暮らしていくプエルトリコ人たちが増えていったという説明であった。今もカリフォルニアには有数の基地があり、軍関連のプエルトリコ人たちの移住は現在でも続いている。例えばサンディエゴにある海軍基地にもプエルトリコ人が多く住み、サンディエゴ・ハウス・オブ・プエルトリコなどの団体が活発な文化活動や奨学金活動を行なっている。そのほか、最近では、専門職にあるプエルトリコ人たちの流入が起きている。学生としてカリフォルニアに来る人や大学教員として、あるいは各種団体のエグゼクティブ・ディレクターとして仕事をするプエルトリコ人などが目立ってきており、それは、カリフォルニアがラテン系住民が多いという歴史的特色から、バイリンガルの専門職が必要とされている理由にもよる点が指摘された。また、このクラブで長年活動が続けてきた長老メンバーのフランシスコ・サーベス (Francisco Sabes)、イスマエル・バルガス (Ismaeli Vargas) は、二人は兄弟のように暮らしてきたこと、上の年代のクラブ設立者たちの話を聞かされてきて、サンフランシスコのプエルトリコ・クラブがどのように維持されてきたか、消滅しそうにもなったけれども、何とか協力して今までやってきたことなどを感慨深そうに語った。同じく長老メンバーであるルイサ・バルガス (Luisa Vargas) は1960年代友達と一緒にプエルトリコから移動してくる途中、友人が褐色だったため、白い肌を持つ彼女はバスの前の席で、友達は後ろの席に座らせられたことが悲しくて泣いていたら、スペイン語はあまり話せないけれど読み書きのできる白人がいて、どうして泣いているのか尋ねてきて、スペイン語を書いて事情を説明して、再び友達と一緒に座らせてもらった話など、当時をしのばせるエピソードを語った。また、サンフランシスコに着いて、スペイン語が聞こえてくると、プエルトリコ人がいると思い喜んで話しかけると、みんなメキシコ人ががっかりしたこと、女の子は危険だからと外出を許してもらえなかったけれど、踊りたくてたまたまに、地下鉄に乗って遠くまでパーティに出かけたことなどを語った。彼らの話は、この地域でのプエルトリコ人同士の互助グループの世界を映し出していた。ニューヨークのようなエスニック・グループ間に存在した厳しい差別と対抗するためのプエルトリコ系の多くの団体とは趣きを異にしていた。また、彼らの話でも、工場での仕事は大変だったけれども、プエルトリコ人だからといった差別を日常的に経験するようなことはサンフランシスコではなかった、ということである¹¹。

サンフランシスコ・ベイエリアにあるハワイ系のプエルトリカン相互扶助組合 (Puerto Rican Union of Mutual Aid, Inc., 1937 年創設) もプエルトリコ人の伝統文化団体でありながら、ハワイ移民の伝統も生きており、ユニークである。会合ではハワイのピジン英語が飛びかう。料理も、ハワイにある食材でプエルトリコ料理を作っていたために、食材が伝統的なプエルトリコの食材とは異なっている。また、ハワイのマジョリティである日系人の影響が彼らの生活のなかに反映している。ハワイの日本人は、プエルトリコ人たちが踊り好きなため、ダンスのことおよびプエルトリコ人のことを「カチカチ」と呼んでいた。ハワイで日本人の女の子をデートに誘うと、親が出てきて「カチカチ、ノー、カチカチ、ノー」と言うということであり、「ダンスに行こう」というのを今でも「let's go to the Kachikachi」と言っているということであった。この団体も前述のプエルトリコ・クラブ同様、文化活動を主とし、フェスティバルや伝統行事のパーティ、若者への奨学金付与などの活動を積極的に行なっている。このクラブでは仲間たちとともにプエルトリコ旅行を計画してきており、プエルトリコの滞在経験は素晴らしいものであったようである。ちなみに、会長のトニー・パガン (Tony Pagan) は、現地でプエルトリコの親族を探してみたけれどもはっきりしなかった、ということである。ハワイには親戚がいるので、夏などの休みはハワイで過ごしてきたそうである。また、家族や兄弟のなかでも、全員がプエルトリコ人のアイデンティティが維持されているわけではなく、それぞれであるとのことであった¹²。ピジン英語を話し、日本文化の影響の強いプエルトリコ人集団というのは西海岸特有の現象である。また、東海岸ほどプエルトリコとの行き来が頻繁でないこともあり、プエルトリコがより理想化されている点も、ニューヨークやシカゴなどのインタビュー調査とは異なる。プエルトリコで純正プエルトリコ人でないとして差別された苦い思いや複雑な感情を語る人はいなかった。

カリフォルニアにはこのように、ハワイ移民の歴史、ラテン系住民の多い地域でのラテン系マイノリティとしての存在、米軍基地の存在、スペイン語と英語のバイリンガル専門職への需要の高さ、といった特徴的な側面があり、この地域のプエルトリコ人コミュニティを特色あるものとしている。

カリフォルニア地域への専門職の流入は、新たな現象であるが、以下に、バイリンガル専門職として活発に活動するアナイダ (Anaida) の例を挙げる。

アナイダは、カリフォルニアのバイリンガル行政に携わってきたプエルトリコ人である。彼女は、カリフォルニア州がバイリンガル教育の廃止を決めた直後の 99 年から 4 年間、カリフォルニア州のバイリンガル教育推進組織 (California Association for Biligual Education, NPO 組織、1976 年創設) の代表を務めた。アナイダは、プエルトリコで生まれ、幼いときにニューヨークに移り、ニューヨークで教育を受けている。ニューヨーク州の教育庁で働き、その後ニューヨーク市の学校区のバイリンガル教師および教師 트레이ナーとして仕事をし、マサチューセッツ州のホリヨーク市のバイリンガルプログラムのリーダー教師、マサチューセッツ州教育庁の行政にも携わった。1982 年にカリフォルニアに移りサンディエゴの州立大学の教師となり、カリフォルニアの三つの地域ローランド (Rowland), オレンジ (Orange), サンタ・アナ (Santa Ana) の学校区のバイリンガル教育行政プログラム、英語教育・カリキュラム改善の行政に携わった。

アナイダは、幼少時、プエルトリコからニューヨークに移ってからも、家で話す会話はスペイン語で、学校に通い始めた 3 年間は小さいのにトラウマで全く記憶がなく、子供なりに大変な苦勞を味わっている。その後、英語を覚えたあとは、学校の様子などの記憶が残っているとのことである。その経験があるから、スペイン語圏家庭の子供たちのことが理解できるし、それが現在の自分につながっている、と語る。カリフォルニアのバイリンガル教育のディレクターを 4 年間務めたが、バイリンガルがもてはやされていた頃はその職を誰もがやりたがったが、カリフォルニアでバイリンガル教育が禁止される決議が成立すると、誰もが敬遠し、頼みこまれて、バイリンガル教育行政の厳しいときを乗り切ったとのことである。マサチューセッツ州のホリヨーク市でバイリンガル教育行政に従事していた頃も、プログラ

ムの責任者のアメリカ人は理解のある人であったが、市長がバイリンガル教育に否定的で、苦勞が多かったとのことである。高校のとき、ニューヨークのアスピーラ (The ASPIRA Association, Inc.) の活動に参加し、アスピーラクイーンになった思い出などに触れながら、アスピーラの教育活動のひとつとして実施されていたプエルトリコ旅行に参加することなどを通して、アスピーラの活動から多くのことを学んだ、ということである。

アナイダが参加していたアスピーラという団体は、プエルトリコ人女性アントニア・パントーハ (Antonia Pantoja 1922-2002) が1961年にニューヨークに創設した団体である。現在、アメリカでも最も大きなラテン系 NPO のひとつとなっている。この団体は、プエルトリコおよびラテン系の若者を教育し、彼らのリーダーシップ育成を目指す組織であり、アスピーラという名前は「志を高く持て」というスペイン語から名付けられた。1972年、アスピーラはニューヨーク教育委員会に対して訴訟を起こし、英語をあまり話さない児童のバイリンガル教育をニューヨークで実現させていることでも有名である。現在、このアスピーラから育った人々をアスピランテと呼ぶが、アナイダもアスピランテの一人である。アナイダは、アントニア・パントーハから学んだことは、自分の居る場所で必要なことをしていき、コミュニティにそれを返す、という考え方だと言う。またそのほかにも、労働者であった父親が労働運動に熱心で、いつもデモンストレーションに参加しているのを見て権利を主張することを学び、現在の自分があると語っている。現在、彼女は、プエルトリコ人女性のリーダーシップを推進する団体、全米プエルトリコ女性会議 (National Conference of Puerto Rican Women) の議長を努めている。2006年には、仲間たちとともに、カリフォルニア地区プエルトリコ人女性会議で、フェリサ・リンコン (Felisa Rincón de Gautier, 1897-1994)、アントニア・パントーハ、フェリシタス・メンデス (Felicita Mendez, 1916-1998) の3人のプエルトリコ人女性に関する会議を開催した。フェリサ・リンコンはプエルトリコの島で政治家として活躍した女性で、首都プエルトリコの市長を1946年から1968年まで務め、首都の市長としてはアメリカ全土で初の女性市長にあたる。フェリシタス・メンデスは、ロサンゼルスで、メキシコ系移民と結婚したプエルトリコ人女性であり、自分の子どもたちが白人の学校に通えなかったことに対して訴訟を起こした人である。1947年に勝訴し、この判決がカリフォルニア全体に影響し、やがてそれが教育機関における人種分離を禁止した1954年のカンザス州、ブラウン判決の参考例となった。しかし、ブラウン判決は有名であるが、フェリシタスらの訴訟のことは一般にあまり知られていない。ましてやプエルトリコ人女性の偉業であることも認知度が低いため、掘り起こしの意味もこめて3人の女性を取り上げたのだと言う。アメリカで初の首都女性市長となったフェリサ、ニューヨークでコミュニティ活動をしバイリンガル教育を広げたアントニア、それにカリフォルニアでマイノリティ差別を撤廃させたフェリシタスというボーダーを越えたプエルトリコ人女性の組み合わせは、プエルトリコ、ニューヨーク、カリフォルニアと移動してきたアナイダの人生と重なる。時の経過とともに彼女も住む場所を変えた。アナイダによれば、仕事の機会があり、温暖な気候が気に入りカリフォルニアへの移住を決めた、ということであった。このようにして、カリフォルニアに移住してきた専門職の一人となり、ニューヨークで学んだプエルトリコ人コミュニティの伝統を受け継ぎつつカリフォルニアで新しい生活の場を築いた。このようにして新たなプエルトリコ人コミュニティが構築されていくという一例として興味深いエピソードである¹³。

現在、カリフォルニア地域のプエルトリコ人社会に関する研究はごく僅かである。プエルトリコ学会などでカリフォルニア在住プエルトリコ人に関する若干の発表があるのみである。しかし、プエルトリコ移民社会のひとつの様態として特色ある地域であり、東部地域とは異なる地域特性のなかでのプエルトリコ人コミュニティの変容の事例として今後も研究を深めて行く必要がある。

4.3. 1980年以降、急激にプエルトリコ人人口が増加したフロリダ中部地域

フロリダ州でのプエルトリコ人の数は近年になり急激に増加した。以前はニューヨーク州に次いで人

口の多い州は、ニュージャージー州であった。しかし、1990年代にはフロリダ州がニュージャージー州を追い越し、ニューヨークに次いでプエルトリコ人が多く住む州となった。しかしながら、ここで見られるプエルトリコ人コミュニティの様態はニューヨークなどのコミュニティとは異なる様相を示している。

プエルトリコ人のフロリダへの移動は2000年代に入っても衰えず、特に、2006年、島で公務員らへの給料未払いなどが起きると、大勢のプエルトリコ人がセントラル・フロリダへと移動した。従来、この地域へのプエルトリコ人の移住者が増加傾向にあったのを見込み、オレンジ郡郡知事補佐官として採用されたプエルトリコ人のリゼット・バラリーノ (Lizette Valarino) は、突然のプエルトリコ人急増に驚き、「怒濤のようにプエルトリコ人が押し寄せてきてる。こんなことは初めて。最近増えてる、なんてもんじゃないくて、週に何千人とやってくるの、行政側としても対応に大わらわよ。」とその様子を筆者に語った¹⁴。

実際、フロリダのプエルトリコ人の数は、1960年に約2万人から、2000年には50万人近くに膨れ上がった。1970年が3万人弱、1980年が9万5千人、1990年25万人弱であるから、10年単位で倍増している(表3参照)。特にフロリダ中部地域のオレンジ郡とアセオラ郡への流入が著しく、1995-2000年の総移入者数がニューヨーク州ブロンクス郡などを抜出、突出した。つまり、以前は多くのプエルトリコ人の移住先はニューヨークであったが、90年代以降はフロリダへと移住の波が移動しているのである¹⁵。

プエルトリコ人が大挙してフロリダへ移動する波ができた理由としては、70年代までプエルトリコ人たちの多くが従事していたニューヨークの繊維産業などの軽工業の衰退が挙げられる。仕事を求めて移住先がアメリカ全土へと拡散し、同時にニューヨークからフロリダへプエルトリコ人が流出する現象も生じた。90年代、ニューヨーク州はプエルトリコ人の絶対数が初めて減少に転じている。フロリダでは特に、1971年にディズニーワールドがオープンすると、以後次々と他のアトラクション施設がオープンし、セントラル・フロリダ一帯がアミューズメント地域として急激に発展してきた。仕事の機会を求めて、プエルトリコ人だけではなく他のヒスパニックの流入も起きている¹⁶。また、フロリダの住居費の安さ、温暖な気候も吸引要因として挙げる移住者も多い。その他、生活の質の良さを求めて島の人たちがフロリダに移動したことに加え、フロリダのヒスパニック人口の急激な増加が、プエルトリコ人に理想的な州に思えたこと、地理的にも文化的にも言語の面からもニューヨークや他の北東部や中西部の州より、より身近であることも手伝っているという指摘がなされている¹⁷。

2005年、筆者がオーランド空港に着いて乗車した空港シャトルバスの運転手もニューヨークから移住してきたプエルトリコ人であった。正しくは、プエルトリコから夫婦で移動してきたとのことであった。ニューヨークでは介護士として働き、またサルサ歌手としても高額収入を得ていた時期もあったそうだが、喉をつぶして立ち行かなくなり、プエルトリコに戻り、夫婦で旅行会社で仕事をしていたそうである。しかし、ある日、店に強盗が押し入り殺されかけ、奥さんが「こんなとこに住んでられない、フロリダに行こう、あそこならディズニーがあるからきっと仕事が見つかる。」と言い張ってフロリダに移ってきたとのことである。奥さんはその言葉通り、ディズニー会社の事務の裏方で仕事してる、ということで、収入は高くはないものの、住居費が安いので何とかなるし、ニューヨークでは高額収入のときもあったけれど、住居費は高いし、アルコールと麻薬ですぐにお金が無くなってたし、それに比べればフロリダではプエルトリコ人たちがたくさん集まるペンタコスタ教会の牧師助手も務め、退廃した生活とは縁が切れたし、あの時代より心は平穏だ、と話していた¹⁸。

彼の話はここに移住してきたプエルトリコ人の一例であるが、このように、暮らしやすさなどを求めて多様な社会階層のプエルトリコ人が、ニューヨークやプエルトリコから、このセントラル・フロリダに移住するようになってきている。

そもそも、セントラル・フロリダへのプエルトリコ人の進出が本格的に始まったのは、1960年代、

オレンジ郡オーランド市に近いボルシア郡 (Volusia County) のデルトナ (Deltona) 市に数百人の島の人たちが不動産を入手したときからである。当時、フロリダ人のディベロッパーがプエルトリコの不動産を通し、老後向けの安価な不動産の宣伝を開始し、現地見学会を安価な価格で提供した。1971年にオーランド近郊にディズニーがオープンし、またプエルトリコのサンフアンでは犯罪が急増していることも手伝い、プエルトリコの人々にとっても投機の対象として魅力的な土地となった。その後、ニューヨークなどの別のコミュニティにこの動きが波及、移住の波はニューヨークやニュージャージーなどの他のプエルトリコ人コミュニティに広まっていった。

現在、ランドスター社が手がけたオレンジ郡にあるミードウッズとアセオーラ市にあるプエナベントゥラスがプエルトリコ人コミュニティとして規模が大きく有名である。中産階級向けのコミュニティを専門にするセントラル・フロリダ最大大手のディベロッパー、ランドスターホームズは、マイアミを根拠地としプエルトリコのサンフアンとニューヨークに事務所を持つ。これらのプエルトリコ人が多く住むニュータウンは、ニューヨークやシカゴなどに見られた伝統的な労働者階級に代表されてきたプエルトリコ人のコミュニティとは様子がかなり異なる。

フロリダのプエルトリコ人の世帯所得平均は、1999年で33,500ドル、プエルトリコの16,543ドルの2倍であり、ニューヨーク平均の22,201ドルよりも高い。教育レベルもプエルトリコ人のなかで最も高く、オーランド地域ではホワイトカラーの職業に多く従事し、特にこの地域の特徴的な産業である観光業に携わる割合が高くなっている。ビジネスを立ち上げる人の割合も他の地域に比べ高い傾向にある¹⁹。また、専門職の人の流入も多い。フロリダの高賃金、労働条件の良さ、昇進の機会の良さ、より良い生活がプエルトリコとアメリカ本土に住む中流階級たちを引き寄せ、政治的にも、大統領選挙に決定的な投票となる層として両政党から注目を集めている。筆者がアセオーラ郡、キシミー市、オレンジ郡に現地調査に入った時点でも、州会議員、市議選、教育委員会委員などの各種選挙動向をめぐり、プエルトリコ人の間でも、共和党、民主党の間でも、ヒスパニック票と共和・民主党両党のせめぎ合いが錯綜していた。詳細は別稿に譲るが、急激に増加するプエルトリコ系住民と保守的な地元住民の間の軋轢、スペイン語を話すプエルトリコからの移住者と英語に堪能なニューヨークからの移住者間の文化の相違など、非常に興味深い現象が観察された。

また、シカゴなどの中西部の暮らしに不満を抱いている人たちも、この温暖地帯の天候の良さ、経済条件の良さ、住居の安さに引かれて移住してきている。こうして、退職者などの年配の人が移動してくると同時に、職を求める若い層も移動してきている。この移動の波のなかで、ニューヨークなどに移住した移住者の二世三世のスペイン語よりは英語を話し、低所得者で低学歴の集団と島から来たプエルトリコの人との間でその文化の相違などから軋轢が起きていることも指摘されている。加えて、アメリカ南部の保守的な層の反発にも根強いものがあり、複雑な様相を呈している。この地域にとっても、英語以外の言語を話すひとつのエスニック集団が大移動してくるのはこれまでの歴史になかったことなのである。しかし、急激なプエルトリコ人の移入は誰にも止められず、この状況に教育などの多くの面で行政側の対応が迫られている。そして、ここで展開される種々の軋轢や問題への取り組みは、ニューヨークで起きてきたことと相似する部分もあるし、新たな側面もある。この地域のプエルトリコ人コミュニティは過去のニューヨークのコミュニティと類似する点も多いことなどが、インタビュー調査などでも浮き彫りになった。しかしながら、その様態はニューヨークやシカゴなど存在したこれまでのコミュニティとはかなり異なっている。年金受給者などの経済的に安定したプエルトリコ人が流入してコミュニティを形成しており、専門職に就いている人も多く、また、ニューヨークで培ってきた政治的ノウハウがあり、活発な行政側への政治活動が行なわれている。

現在、この地域に関しては、Duany, Matos (2006) らの詳細な研究が存在する。ただし、教育問題や政治的勢力に関する具体的な動向に関しては不確定もしくは未知の部分が多い。今後、この地域に特

有のプエルトリコ系住民のコミュニティが形成されていくことは確実である。州議会、市議会、教育委員会へのプエルトリコ人の進出も進行している。インタビュー調査などを中心とした通時的調査を継続し、今後の動向も押さえながら研究を深めて行きたい。

5. 結論

本稿では、ハワイ、カリフォルニア、フロリダという三つの地域の特徴を考察した。ハワイに住むプエルトリコ人は、ローカルハワイアンの中なかで変容され維持されてきた伝統を持ち、プエルトリコ人であることの定義を多様化させていた。また、カリフォルニアには、ハワイ移民の歴史、ラテン系住民の多いなかでのラテン系マイノリティという存在、米軍関連のプエルトリコ人の存在、バイリンガル専門職の流入といった多様な様態の移民が凝縮される形でコミュニティが形成されていた。この二つの地域では、プエルトリコ人の集住の度合いは低く、また、他のエスニック・グループとの融合もかなり進行していた。一方、セントラル・フロリダでは、急激なプエルトリコ人の流入現象が生じ、集住の度合いは密であり、さながらプエルトリコの町ができあがっているほどであった。にもかかわらず、ニューヨークとは異なる特徴を備えたコミュニティ像が観察された。

これまで、プエルトリコ人の移民と言えばニューヨークの移民がその代表であった。ニューヨークでも、移民当初から、文化活動やコミュニティ活動、地域住民の組織化と行政への働きかけなどが活発に繰り広げられ、独自のコミュニティ空間を作り上げていた。しかし、最近では、プエルトリコ系住民は全米に拡散して異なる性格を持つコミュニティを作り上げ、それぞれ特徴のある居住空間を形成している。時代の移り変わりに伴い伝統を継承しながらも新たな考えかた、言語状況を創出し、ニューヨークやシカゴのインナーシティに見られたゲットーという場に繰り広げられたコミュニティとはその様相がかなり異なる。にもかかわらず、どの地域においてもプエルトリコ人という明快な意識と文化が存在している。

実際には、今回本稿で考察した地域のほかにも多様なコミュニティが存在する。マサチューセッツ州ハートフォードではプエルトリコ人市長を出すなど政治的に活発な運動を展開している。その近郊のスプリングフィールドなどにもコミュニティ活動の独自の動きがある。また、コネチカット州のホリヨーク市などは人口に占めるプエルトリコ人比率が全米で最大であり、行政側がその対応に苦心している。いずれも、80年代以降プエルトリコ人移民社会の中なかで生じてきている大都市から小都市への移動の急増の結果として起きている現象である。これらの地域では、単にプエルトリコ人コミュニティ側の活動にとどまらず、行政側のほうが増加するプエルトリコ人住民への対応を迫られ、住居問題やバイリンガル教育を含めた教育問題への取り組みなどが進められていた。また、メキシコ系人口の多いテキサス州にも教員や看護師などのプエルトリコ系バイリンガル・プロフェッショナルの移住傾向が指摘されている。これらの地域の調査研究は今後の課題とするところであるが、本稿で取り上げたそれぞれのコミュニティを考察するだけでも現在のプエルトリコ人コミュニティの多様性が浮き彫りになったと言える。

プエルトリコ移民全体の研究は緒に着いたばかりである。本研究者は、米国北東部地区、コネチカット州、マサチューセッツ州の地方都市でもプエルトリコ系住民が増加しており、現在調査を継続中である。また、今までほとんどプエルトリコ系住民が居住していなかった小都市においても急激にプエルトリコ系住民の割合が増加している地域が出てきており、そこで生じている現象などを調査することで、多様化の実態がさらに解明されると思われる。また、時間的余裕をみて、本研究などで生じた信頼関係をもとに、一定期間、参与観察も実施すれば、研究も深まるものと思われる。今後の課題としたい。

注

1. 本稿で用いるプエルトリコ人という呼称は、「あなたは何人ですか」と聞かれたら「プエルトリコ人です」と答える人たちのことを指している。これはアメリカ国勢調査が用いている定義である。国勢調査局の立場は、調査票に記入する者の申告に従うというものである。したがって、アメリカ合衆国の国勢調査局の人口統計におけるプエルトリコ人とは、「自分はプエルトリコ人」だと考え、そう申告した人のことである。
2. Falcón, Angelo. (2004). pp.1-2.
3. 本研究では、主に地元コミュニティの事情、歴史に詳しいコミュニティ団体を中心に訪問調査を実施した。コミュニティの選別に関しては、ニューヨーク市立大学、プエルトリコ研究センターのプエルトリコ系団体一覧およびコミュニティ団体ホームページを参考にした。また、当該地域大学のプエルトリコ研究者、現地のコミュニティ活動家と連絡を取り、インタビュー団体選別の助言を受けながら進めた。インタビュー内容は本人の生い立ちや言語環境を本人から語ってもらったうえで、当該地域のコミュニティの様子、歴史、組織活動の内容などを自由に話してもらった形式を採用した。以下は調査内容一覧である。

インタビュー実施時期	インタビュー対象者	地域的特性の内容
ハワイ、 オアフ島 2006 3/4-3/10	1. ラジオ局ラテンミュージック担当 alma latina 主催ナンシー・オルティス (Nancy Ortiz) Centro Hispano de Hawaii 相互扶助団体エグゼクティブ・ディレクター 2. ハワイ大学マノア・キャンパス、スペイン語学科アウスティン・ディアス (Austin Díaz) 3. 同大学英文学部ロドニー・モラーレス (Rodny Morales)	日系人との関わりが強いマルチカルチャーのなかでのプエルトリコ伝統の継承
ハワイ、 オアフ島、 ハワイ島 2007 3/2-3/14	1. ハワイ大学マノア・キャンパス、スペイン語学科アウスティン・ディアス (Austin Díaz) 2. 同大学英文学部ロドニー・モラーレス (Rodny Morales) 3. ハワイ地域歴史研究者ノルマ・カー (Norma Carr) 4. ハワイプエルトリコ協会事務局会計担当 ジョン・オルティス (John Ortiz) 5. ハワイ、ハワイ島日本人会メンバー	
カリフォルニア、 サンフランシスコ 2005 8/15-8/31	1. サンフランシスコ女性ビルディング、オーラルヒストリープロジェクト担当スーザン・ペドリック (Susan Pedrick) 2. サンフランシスコ女性ビルディング、ラテンアメリカ女性団体 Mujeres Unidas y Activas、ファニータ・フローレス (Juanita Flores) 3. ミッション文化センター、ディレクター、ジェニー・ロドリゲス (Jennie E. Rodríguez) 4. サンフランシスコ女性ビルディング、ディレクター、テレサ・メヒア (Teresa Mejía) 5. ミッション文化センター、ギャラリー責任者パトリシア・ロドリゲス (Patricia Rodríguez) 6. サンフランシスコ州立大学ラサ・スタディーズ助教授ナンシー・ミラバル (Nancy Raquel Mirabal)	バイリンガル専門職として大学教師、文化団体運営責任者などの仕事に従事
カリフォルニア、 サンディエゴ 2006 8/1-8/7	ハウス・オブ・プエルトリコ (House of Puerto Rico) ミーティング参加、メンバーへのインタビュー 1. 創設メンバー、ラルフ・コスタス (Ralph Costas) 2. 会長ホセ (José) 3. ボランティアスタッフ、エベリン (Evelyn) 4. テレビドラマ、ロスト、プロデューサー、ハビエル・グリジョ・マルサク (Javier Grillo Marxuach)	サンディエゴ米軍基地関連のプエルトリコ人や会社経営者などの専門職にある人たちのコミュニティ活動
カリフォルニア、 ロサンゼルス 2007 8/1-8/3	1. チャップマン大学教育学部助教授アナイダ・コロナムニス (Anaida Colón-Muniz)、プエルトリコ女性会議カリフォルニア地区会長	バイリンガル教師としてニューヨークから移住してきた専門職
カリフォルニア、 ロサンゼルス、 サンタ・アナ 2008 3/15-3/31	1. エミー賞受賞ドキュメンタリー作家メンデス対ウィスメンスター訴訟のドキュメンタリー作家 サンドラ・ロビー (Sandra Robbie) 2. チャップマン大学教育学部アナイダ・コロナムニス (Anaida Colón-Muniz)、プエルトリコ女性会議カリフォルニア地区会長 3. プエルトリコ女性会議副会長、エバンヘリーナ・ブリグノニ (Evangeline Brignoni) 4. 会社経営アイリーン・アルバラード・スワイズグッド (Aileen Alvarado-Swaigood) 5. オレンジ郡児童セラピー芸術センター運営アナ・ヒメネス (Ana Jiménez) 6. メンデス訴訟で共学を勝ち取ったシルビア・メンデス (Sylvia Mendez) 7. ハウス・オブ・プエルトリコ、サンディエゴメンバー、アンヘル・L・フローレス (Angel L. Flores)	カリフォルニア地区のバイリンガル教育に携わるプエルトリコ人教師、他のラテン系住民との差別問題に関する共闘、メキシコ国境でバイリンガル警備員として職にあたるプエルトリコ人など
カリフォルニア、 サンフランシスコ 2008 9/10-9/30	1. UCLA パークレー校エスニック・スタディーズ助教授ラモン・グロスフォーゲル (Ramón Grosfoguel) 2. プエルトリコ相互扶助団体ユニオン市会長トニー・バガン (Tony Pagán) 3. サンフランシスコ・プエルトリコ・クラブ、セクレタリー、イルマイリス・バルガス (Irmairis Vargas) 4. 同団体メンバー、イスマエル・バルガス (Ismael Vargas) 5. 同上、フランシスコ・サーベス (Francisco Sabes) 6. 同上、ルイサ・バルガス (Luisa Vargas) 7. 同団体会長ホセ・アギラル (José Aguilar) 8. プエルトリカン・シビック・クラブ、サンホセ、ジョニー・サルディビア (Joynny Saldivia) 9. UCLA パークレー校大学院生組合執行部ゼリデス・マリア・リバス (Zelideth María Rivas)	ハワイ移民の歴史のなかでできあがったコミュニティと教育関係者などの専門職にある移住者という新しい住民との共存

フロリダ、 オーランド 2005 8/1-8/14	<ol style="list-style-type: none"> 1. オーランドシャトルバス BeeLine 運転手 2. プエルトリコ政府連邦行政事務所フロリダ支部、シルビア・カセレス (Sylvia T. Cáceres) 3. オーランド商工会議所所長、カースティン・パラシオス (Kirsten Palacios) 4. オレンジ郡行政助手、ジュイッア・ラミレス・ベインティドス (Yuitxa Ramirez-Veintidos) 5. オレンジ郡知事補佐官秘書、ルビー・ムニョス (Ruby Muñoz) 6. オレンジ郡議会議員ミルドレッド・フェルナンデス (Mildred Fernández) 7. 同上議員秘書ドリス (Doris) 8. オレンジ郡行政助手、マリア・L・カルドナ (María L. Cardona) 9. オーランド・マリ奥特・ダウタウン、レストランコック、ドリス (Doris) 10. ナサツァー (Gator Tours Space Center Tour) バス運転手 11. オレンジ郡知事補佐官、リゼット・バラリーノ (Lizette Valarino) 	ニューヨーク、プエルトリコからの移住、急激なプエルトリコ人の流入を反映した政治勢力の拡大
フロリダ、 オーランド 2006 8/7-8/14	<ol style="list-style-type: none"> 1. プエルトリコ政府連邦行政事務所フロリダ支部、職員ラモン (Ramón) 2. 同事務所、職員ルイサ (Luisa) 3. プエルトリコ人相互扶助団体アソシアシオン・ボリンケーニャ・デ・セントラルフロリダ、ビクトル (Victor) 4. 新聞社エル・ヌエボディア、フロリダ支社運営責任者、ハイメ (Jaime) 5. 同新聞社フロリダ支社社長、リンダ (Linda) 6. レストラン、ガリータ店主エクトル・オルティス (Hector Ortiz) 	プエルトリコ政府機関、プエルトリコの大学の分校進出、スペイン語新聞社の新規参入
フロリダ、 オーランド 2007 8/4-8/16	<ol style="list-style-type: none"> 1. アセオラ郡議会議員委員会コミュニティ・ライアゾン、マルタ・モクソ・サンティアゴ (Marta Moczó-Santiago) 2. アセオラ郡コミュニティ活動家、アンジー・ティレット (Angie Thillet) 3. キシミー市警察巡査部長、カミオーラ・アリセア (Camille Alicea) 4. キシミー市国際文化団体、ミラグロス・トーレス (Milagros Torres) 5. 同団体、クリスティーナ・B・ディアス (Christine B Díaz) 6. アセオラ・ヒスパニック商業組合メンバー、ハム屋喫茶店経営、リック・サボリード (Rick Saborido) 7. 同組合メンバー、ネイル店経営、エバ・ロサリオ (Eva Rosario) 8. キシミー市議会議員、カルロス・イリザリ (Carlos Irizarry) 9. アセオラ郡議会議員、ジョン・クニョネス (John Q. Quiñones) 10. 新聞エル・ヌエボディア記者、セシリア・フィゲロア (Cecilia Figueroa) 11. フロリダ扶助団体運営責任者、ジョセフィーナ・カルデロン (Josefina Carderón) 12. プエルトリコカフェのオーナー、マリア・コルデーロ (María Cordero) 13. 民主党下院議員フロリダ選出、ダレン・ソト (Darren M. Soto) 14. アセオラ郡民主党政治家アルマンド・ラミレス (Armando Ramirez) 15. オーランド・センティネル新聞支局長、マーク・ピノ (Mark Pino) 16. 共和党政政治家、会社経営、アルトゥーロ・オテロ (Arturo Otero) 17. オーランド商工会議所副所長、ビルマ・キンターナ (Vilma Quintana) 18. プエルトリコ商工会議所所長、エミリオ・ベレス (Emilio Perez) 19. アセオラ老人介護ケア施設運営、カルメン・カラキージョ (Carmen Carasquillo) 20. アセオラ商工会議所所長、ナンシー・エリス (Nancy Ellis) 	プエルトリコ人政治勢力の拡大と政治活動の活性化、ニューヨークコミュニティ活動家がフロリダへ移住して各種のコミュニティ活動を担う、バイリンガル教育整備への動き

4. Acosta-Belén, Edna, et al. (2000), pp. 10-12 を参照.
5. Acosta-Belén, et al. (2000), Acosta-Belén and Santiago (2006), Duany (2002), Grosfoguel (2003), Whalen (2005).
6. ハワイ地域研究者ノルマ・カーとの電話インタビューメモ資料、2007 年 3 月ハワイ、オアフ島、筆者所有.
7. ハワイ・プエルトリコ人協会事務局会計担当のジョン・オルティス (John Ortiz) とのインタビュー資料、2007 年 3 月オアフ島ハワイ・プエルトリコ人協会事務所にて録音、筆者所有.
8. Morales, Rodney. (1988). *The Speed of Darkness*, 所有.
9. ハワイ大学英文学部助教授ロドニー・モラーレスとのインタビュー資料、2007 年 3 月ハワイ大学マノアキャンパス、モラーレス氏のオフィスにて録音、筆者所有.
10. Whalen (2005), pp.43-67 参照.
11. サンフランシスコ・プエルトリコクラブ秘書イルマイリス・バルガス、同団体メンバー、フランシスコ・サーベス、イスマエル・バルガス、ルイサ・バルガスとのインタビュー資料、2008 年 9 月 22 日および 9 月 25 日 サンフランシスコ、ミッション地区クラブハウスにて録音、筆者所有.
12. プエルトリコ相互扶助団体ユニオン市会長トニー・バガンとのインタビュー資料、2008 年 9 月 18 日、ニューアーク Homewood Suites by Hilton Newark-Fremont ホテルにて録音、筆者所有.
13. チャップマン大学教育学部アナイダ・コロナムニスとのインタビュー資料、2007 年 8 月 2 日、カリフォルニア、オレンジ郡チャップマン大学教育学部研究室にて録音、筆者所有.
14. フロリダ州オレンジ郡知事補佐官リゼット・バラリーノとのインタビュー録音資料、2006 年 8 月オレンジ郡シティ・ホルのオフィスにて録音、筆者所有.
15. Duany (2006), p.65.
16. Orlando Sentinel, *The Orlando Market for Orlando's Hispanic Market* 参照.
17. Duany (2006) 参照.
18. 空港シャトルバス運転手とのインタビュー資料、2005 年 8 月オーランドにてインタビュー、筆者所有.
19. Duany (2006) 参照.

参考文献

- ・ Acosta-Belén, Edna, et al. (2000). *Adiós, Borinquen Querida: The Puerto Rican Diaspora, Its History, and Contributions*. Albany, NY: Center for Latino, Latin American and Caribbean Studies, State University of New York at Albany.
- ・ Acosta-Belén, Edna, and Carlos E. Santiago, (Eds.). (2006). *Puerto Ricans in the United States: A Contemporary Portrait*. Boulder: Lynne Rienner Publishers.
- ・ Andreu Iglesias, César, (Ed.). (1977/1988). *Memorias de Bernardo Vega: contribución de la historia de la comunidad puertorriqueña en Nueva York*, Río Piedras, Puerto Rico: Ediciones Huracán.
- ・ Camacho Souza, Blase, and Spuzza, Alfred P. (1985/2000). *De Bprinquen a Hawaii nuestra historia: from Puerto Rico to Hawaii*, Honolulu: Puerto Rican Heritage Society of Hawaii.
- ・ Carr, Norma. (1989). *The Puerto Ricans in Hawaii: 1900-1958*, (A dissertation submitted to the graduated division of the University of Hawaii in partial fulfillment of the requirements for the degree of doctor of Philosophy in American Studies). Hawaii: UMI Dissertation Services.
- ・ Centro de Estudios Puertorriqueños (2001), *Centro Journal, Volume XIII Number I Spring 2001*, New York : Centro de Estudios Puertorriqueños, Hunter College, City University of New York.
- ・ Chavez, Linda. (1992). *Out of the Barrio: Toward a New politics of Hispanic Assimilation*, New York: BasicBooks, A Division of HarperCollins Publishers, Inc.
- ・ Christenson, Matthew. (2001). "Evaluating Components of International Migration: Migration Between Puerto Rico and the United States", *U.S. Census Bureau, Working Paper Series No. 64*.
- ・ Colón, Jesús. (1961/1982). *A Puerto Rican in New York and Other Sketches*. New York: International Publishers.
- ・ Cruz Báez, Ángel David, and Thomas D. Boswell. (1997). *Atlas Puerto Rico*. Miami: Cuban American National Council.
- ・ De Jesús, Joy L. (Ed.). (1997). *Growing Up Puerto Rican*. New York: Avon Books.
- ・ Duany, Jorge. (2002). *The Puerto Rican Nation on the Move: Identities on the Island and in the United States*. Chapel Hill: University of North Carolina Press.
- ・ Duany, Jorge, and Félix V. Matos-Rodríguez. (2006). *Puerto Ricans in Orlando and Central Florida, Policy Report. Vol.1, No. 1*. New York: Centro de Estudios Puertorriqueños. Hunter College, City University of New York.
- ・ Falcón, Angelo. (2004). *Atlas of Stateside Puerto Ricans*. Washington, D.C.: Puerto Rico Federal Affairs Administration.
- ・ Glazer, Nathan, and Moynihan, Daniel Patrick. (1963/1995). *Beyond the Melting Pot: The Negroes, Puerto Ricans, Jews, Italians, and Irish of New York City*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- ・ Grosfoguel, Ramón. (2003). *Colonial Subjects: Puerto Rico in a Global Perspective*. Berkeley: University of California Press.
- ・ Mills, Wright C., et al. (1950). *Puerto Rican Journey: New York's New ert Migrants*. New York: Harper & Brothers Publishers.
- ・ Morales, Rodney. (1988). *The Speed of Darknes*. Honolulu: Bamboo Ridge Press.
- ・ Orlando Sentinel, *The Orlando Market for Orlando's Hispanic Market*. n.d.
- ・ Rivera-Batiz, Francisco L., and Santiago, Carlos E. (1996). *Island Paradox: Puerto Rico in the 1990s*. New York: Russell Sage Foundation.
- ・ Rodríguez, Clara E. (1989). *Puerto Ricans: Born in the U.S.A.* Boston: Unwin Hyman.
- ・ Rodríguez, Clara E. (2000). *Changing Race: Latinos, the Census, and the History of Ethnicity in the United States*. New York: New York University Press.
- ・ Sanchez Korrol, Virginia E. (1994). *From Colonia to Community: The History of Puerto Ricans in New York City*. Berkeley: University of California Press.
- ・ U. S. Bureau of the Census. (2001). *The Hispanic Population. Census 2000 Brief*. from <https://www.census.gov/prod/2001pubs/c2kbr01-3.pdf>
- ・ Whalen, Carmen Teresa. (2001). *From Puerto Rico to Philadelphia: Puerto Rican Workers and Postwar Economies*. Philadelphia: Temple University Press.
- ・ Whalen, Carmen Teresa, and Vásquez-Hernández, Victor. (Eds.). (2005). *The Puerto Rican Diaspora: Historical Perspectives*. Philadelphia: Temple University Press.
- ・ グレイザー, ネイサン, モイニハン, ダニエル・P. (1986). 『人種のるつぼを超えて: 多民族社会アメリカ』 東京: 南雲堂.
- ・ ミルズ, C.W., シニア, C., ゴールドセン, R. K. (1991). 『プエルトリカン・ジャーニー: ニューヨークに惹きつけられた移民たち』 東京: 恒星社厚生閣.